

角結膜腫瘍および腫瘍状病変の発生頻度

土至田 宏¹⁾, 中安 清夫¹⁾, 沖坂 重邦²⁾, 金井 淳¹⁾

¹⁾順天堂大学医学部眼科学教室, ²⁾防衛医科大学校眼科学教室

要 約

1980年1月から1992年12月までの13年間に、順天堂大学眼科学教室で病理組織学的検索を行った角結膜腫瘍および腫瘍状病変126例について、その種類と発生頻度に関する検索を行った。良性の腫瘍および腫瘍状病変は116例(92.1%)で、そのうち、最も多かった疾患は色素性母斑32例(27.6%)であった。なかでも複合母斑が最も多く、その半数を占めた。次いで、嚢胞24例(20.7%)、輪部デルモイド15例(12.9%)と続いた。悪

性腫瘍は全体で10例(7.9%)に認められた。その内訳は、上皮内癌3例、悪性リンパ腫2例、扁平上皮癌2例、粘液癌・皮脂腺癌・転移性腫瘍各1例の10例で、男女比は男性4例、女性6例で、摘出年齢分布は47~92歳であった。(日眼会誌 99:186-189, 1995)

キーワード：結膜腫瘍, 角膜腫瘍, 頻度, 病理組織学的検索

Incidence of Tumors and Tumor-like Lesions in the Conjunctiva and the Cornea

Hiroshi Toshida¹⁾, Kiyoo Nakayasu¹⁾, Shigekuni Okisaka²⁾
and Atsushi Kanai¹⁾

¹⁾Department of Ophthalmology, Juntendo University School of Medicine

²⁾Department of Ophthalmology, National Defence Medical College

Abstract

Incidence of tumors and tumor-like lesions in conjunctiva and cornea seen at Juntendo University during the 13-year period from 1980 to 1992 was analysed histopathologically. There were 126 cases including 116 benign (92.1%) and 10 malignant lesions (7.9%). Pigmented nevi (32 cases) were most frequently found, accounting for 27.6% of the benign tumors and tumor-like lesions, half of which were compound nevi (16 cases). Nevi were closely followed by cysts (24 cases, 20.7%) and dermoids (15 cases, 12.9%). Carcinoma in situ (3 cases) was most

frequently found, accounting for 30% of the malignant tumors (10 cases), closely followed by malignant lymphoma (2 cases), squamous cell carcinoma (2 cases), mucinous carcinoma (1 case), sebaceous gland carcinoma (1 case) and metastatic tumor (1 case). The ratio of males to females was 4:6. Age distribution of the patients was 47~92 years. (J Jpn Ophthalmol Soc 99:186-189, 1995)

Key words: Conjunctival tumor, Corneal tumor, Incidence, Histopathological study

I 緒 言

角結膜の腫瘍および腫瘍状病変は比較的頻度が高く、眼科診療において重要な疾患群であるにもかかわらず、疾患の分類が煩雑であったり、確定診断に病理組織検査を必要とするなどのためか、我々臨床医にとってややなじみの薄い疾患群のように思われる。また、本邦におけるまとまった統計的検索も少なく、我々の知る限り、猪俣ら¹⁾、および高橋ら²⁾の報告のみである。そこで、今回

我々は最近13年間に、順天堂大学眼科学教室で病理組織学的検索を行った角結膜腫瘍および腫瘍状病変126例について、その種類と発生頻度に関する検索を試みたので報告する。

II 対 象

1980年1月から1992年12月までの13年間に、当眼科学教室で病理組織的検索の行われた眼科領域の腫瘍および腫瘍状病変は合計359例であった。このうち、今回

別刷請求先：113 東京都文京区本郷3-1-3 順天堂大学医学部眼科学教室 土至田 宏

(平成6年7月11日受付, 平成6年8月19日改訂受理)

Reprint requests to: Hiroshi Toshida, M.D. Department of Ophthalmology, Juntendo University School of Medicine, 3-1-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan

(Received July 11, 1994 and accepted in revised form Augusts 19, 1994)

表1 眼の腫瘍および腫瘍状病変の部位別例数

順天堂大学眼科(1980~1992)		
角結膜	角結膜に限局	118 (32.9%)
	角結膜・眼瞼	4 (1.1%)
	角結膜・眼窩	3 (0.8%)
	角結膜・眼瞼・眼窩	1 (0.3%)
角結膜小計		126 (35.1%)
その他	眼瞼に限局	116 (32.3%)
	眼窩に限局	58 (16.2%)
	眼内に限局	51 (14.2%)
	眼瞼・眼窩	4 (1.1%)
	眼窩・眼内	4 (1.1%)
合計		359(100.0%)

表2 良性角結膜腫瘍および腫瘍状病変の疾患別頻度

色素性母斑	32 (27.6%)
嚢胞	24 (20.7%)
輪部デルモイド	15 (12.9%)
リンパ球系細胞腫瘍状病変	12 (10.3%)
乳頭腫	7 (6.0%)
肉芽腫	6 (5.2%)
炎症性偽腫瘍	4 (3.4%)
その他	18 (15.5%)
合計	116(100.0%)

の検索の対象としたものは、角膜および結膜に病変の及んでいる腫瘍および腫瘍状病変 126 例である(表1)。全 126 例のうち、角結膜のみに限局した腫瘍および腫瘍状病変は 118 例で、さらに、病変が眼瞼・眼窩などに及んでいたものは 8 例認められた。各々の疾患名は、当大学病理学教室で原則的に病理組織学的検索報告書を retrospective に検索することによって決定したが、必要に応じて病理標本の観察、カルテの記載事項の確認などを行い、疾患名を決定した。なお、疾患名は、WHO による病理組織分類³⁾に記載の分類、疾患名を可能な限り使用し

た。しかし、なかには本邦において従来から使用されている慣用名を用いざるを得ない疾患もあった。また、WHO 分類に記載されている瞼裂斑、翼状片は各々 2 例、375 例認めたものの、今回の検索では対象外とした。

III 結果

1. 良性角結膜腫瘍および腫瘍状病変

良性の角結膜腫瘍および腫瘍状病変の疾患別頻度を表 2 に示す。良性腫瘍は 126 例中 116 例で、角結膜腫瘍および腫瘍状病変全体の 92.1% であり、その摘出年齢の分布は 2~81 歳、平均摘出年齢は 31.8 歳であった。男女比は、男性 57 例 (49.1%)、女性 59 例 (50.9%) で、性比に有意差を認めなかった。最も多く認められた疾患は色素性母斑で、嚢胞、輪部デルモイドが続いた。これら上位 3 疾患で良性腫瘍全体の 61.2% を占めていた。これらの疾患については、さらに細かく分析した。

1) 色素性母斑 (表 3, 図 1)

良性腫瘍および腫瘍状病変 116 例中 32 例、27.6% に認められ、全疾患中、最も多い疾患であった。母斑細胞の存在部位により、上皮内に限局している境界母斑、上皮内・上皮下双方にわたっている複合母斑、上皮下のみの上皮下母斑の 3 種類に分類したが、このうち、最も多かったのは複合母斑で、32 例中 16 例と半数を占めていた。本疾患の腫瘍摘出時の年齢は平均 27.5 歳で、3 種類の平均年齢には有意差を認めなかった。しかし、発症部位別に

表3 色素性母斑

	輪部	涙丘部	その他	合計(%)	平均年齢
境界母斑	2(6.3)	0(0.0)	1(3.1)	3(9.4)	25.3歳
複合母斑	8(25.0)	1(3.1)	7(21.9)	16(50.0)	24.4歳
上皮下母斑	3(9.4)	3(9.4)	7(21.9)	13(40.6)	32.2歳
合計	13(40.6)	4(12.5)	15(46.9)	32(100.0)	
平均年齢	19.7歳	41.0歳	28.8歳		27.5歳

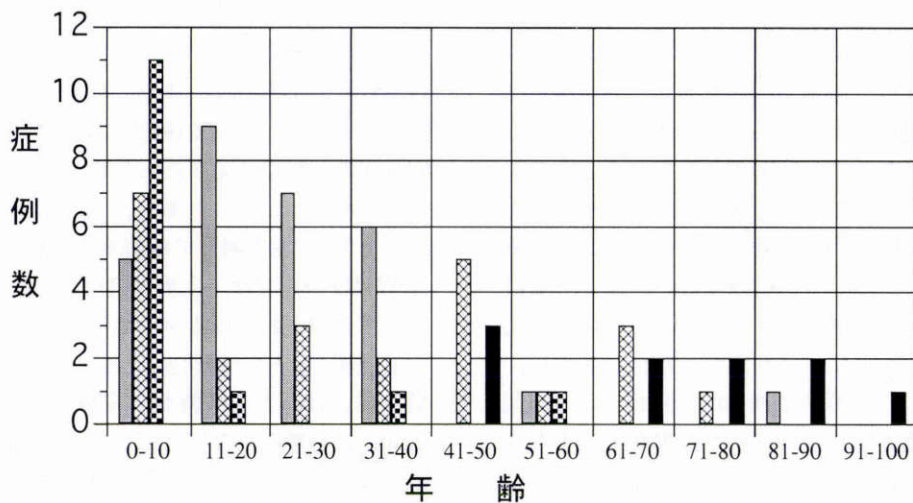


図1 色素性母斑、嚢胞、輪部デルモイドおよび悪性腫瘍の年代別にみた症例数の推移。
 ●: 色素性母斑, ⊞: 嚢胞, ⊠: デルモイド, ■: 悪性腫瘍

表4 嚢胞

		平均年齢
単純嚢胞	12 (50.0%)	38.7 歳
表皮様嚢胞	6 (25.0%)	37.7 歳
皮様嚢胞	4 (16.7%)	4.5 歳
不明	2 (8.3%)	
合計	24(100.%)	32.7 歳

みると、角結膜輪部に存在したものが最も若く、摘出時の平均年齢は 19.7 歳であった。男女比に有意差は認められなかった。

2) 嚢胞 (表4, 図1)

良性腫瘍中 2 番目に多く、116 例中 24 例、20.7% に認められた。単純嚢胞が 24 例中 12 例で、そのうちの 2/3 にあたる 8 例が、手術や外傷後に扁平上皮が上皮下結合織内に陥頓した封入嚢胞であった。次に、表皮様嚢胞、皮様嚢胞が続いた。嚢胞全体の平均摘出年齢が 32.7 歳なのに対し、皮様嚢胞のみ 4.5 歳と非常に若年であった。男女比は、男性 11 例 (45.8%)、女性 14 例 (54.2%) と、わずかに女性に多く認められた。

3) 輪部デルモイド (皮様腫) (図1)

良性 116 例中 15 例、12.9% に認めた。平均摘出年齢は 11.8 歳と若年であった。男女比は、男性 15 例 (46.9%)、女性 17 例 (53.1%) で、わずかに女性に多く認められた。

2. 悪性角結膜腫瘍

眼科領域全体での腫瘍および腫瘍状病変の部位別の悪性頻度を表5に示す。1980年1月から1992年12月までに組織病理学的検索の行われた腫瘍および腫瘍状病変は、前述の通り全体で359例であったが、そのうち74例(20.6%)が悪性であった。しかし、角結膜のみに局限していた腫瘍の悪性頻度は4例(3.4%)で、他の部位に比べ、非常に少なかった。また、角結膜領域を越えて眼瞼に及んでいたもの2例、眼窩にわたっていたもの1例、眼瞼・眼窩両者にわたっていたもの1例を合わせると、悪性の症例は10例(7.9%)であった。全10例の内訳は、扁平上皮性の上皮内癌3例、扁平上皮癌2例、悪性リンパ腫2例、粘液癌1例、眼瞼から波及したと思われる皮脂腺癌1例、転移性腫瘍1例であった。悪性黒色腫は1例も認められなかった。また、上皮内癌3例のうちの1例は65歳男性の再発例であった。腫瘍摘出時の年齢分布は47~92歳、平均年齢は68.3歳と、良性のものと比較して、はるかに高齢であった。悪性腫瘍は40歳以下には1例も認められず、年代別にみると表6のごとく、40代以降、高齢になるにつれて、悪性腫瘍の割合が増加し、特に、70代では33.3%、80代では50%、90代では100%と、かなりの高頻度で認められていた。男女比は4:6で、症例数が少ないものの、女性にやや多く認められた。悪性腫瘍の症例数を年毎にみると、1980年は1例、1981年は2例、1985年は2例、1988年は2例、1989年、1990

表5 部位別の腫瘍および腫瘍状病変の悪性頻度

順天堂大学眼科(1980~1992)		
角結膜	角結膜に局限	4/116 (3.4%)
	角結膜・眼瞼	4/ 4(100.0%)
	角結膜・眼窩	1/ 3 (33.3%)
	角結膜・眼瞼・眼窩	1/ 1(100.0%)
角結膜小計		10/126 (7.9%)
その他	眼瞼に局限	12/116 (10.3%)
	眼窩に局限	9/ 58 (15.5%)
	眼内に局限	39/ 51 (76.5%)
	眼瞼・眼窩	2/ 4 (50.0%)
眼窩・眼内		4/ 4(100.0%)
合計		74/359 (20.6%)

表6 年代別にみた角結膜腫瘍および腫瘍状病変における悪性の占める割合

0~40 歳	0/78 (0.0%)
41~50 歳	3/12 (25.0%)
51~60 歳	0/ 5 (0.0%)
61~70 歳	2/15 (13.3%)
71~80 歳	2/ 6 (33.3%)
81~90 歳	2/ 4 (50.0%)
91~100 歳	1/ 1(100.0%)

年、1991年は各1例であった。上皮内癌の79歳男性は腫瘍摘出後、約5年目に脊髄腫瘍で死亡しているが、結膜腫瘍の転移かどうかは不明であった。また、転移性腫瘍の49歳女性は、多臓器転移のため死亡している。

IV 考 按

角結膜の腫瘍および腫瘍状病変の国際的な組織病理分類として、WHOから発表された分類³⁾がある。この分類法は、1980年 Zimmermanらによって発表されたものであるが、本邦では前述のごとく我々臨床医にとってややなじみの薄い分類法や、疾患名が用いられているようである。したがって、文献によっては従来からの本邦での慣用名が用いられていることも多く、同一疾患でも異なった疾患名が存在することがある。これは今回我々が苦慮した点でもあり、また、疾患名の分類上の大きな問題点でもある。今回の検索での分類法は、基本的にはWHOの分類法に従ったものの、中には慣用名を用いざるを得なかったものもあり、これらは眼科用語集⁴⁾、眼病理アトラス⁵⁾を参照して疾患名を記載した。例えば、嚢胞はWHO分類では、上皮性良性腫瘍の中に単に「cyst」として分類されているが、今回の検索ではさらに、嚢胞を単純嚢胞、表皮様嚢胞、皮様嚢胞に分類した。WHO分類に従えば、表皮様嚢胞、皮様嚢胞は過誤腫(hamartoma)に分類されなければならないが、今回は嚢胞の中に入れた。また、リンパ球系細胞増生、炎性偽腫瘍などの疾患名はWHO分類に記載されていないものの、今回は慣用名として用いた。

眼科領域で扱う腫瘍および腫瘍状病変の部位別症例数は、表1に示した通りである。このうち、角結膜のみに限局のものが全腫瘍および腫瘍状病変359例中118例(32.9%)で最も多く、さらに角結膜から眼瞼・眼窩に病変が及んでいるものを含めると126例(35.1%)にも達していた。次に多かった疾患は眼瞼のみに限局した腫瘍および腫瘍状病変で、116例(32.3%)であった。また、眼窩のみに限局したものは58例(16.2%)、眼内のみのものは51例(14.2%)であった。したがって、角結膜の腫瘍および腫瘍状病変は、頻度の点から考えれば眼科領域における腫瘍状病変のうち、最も重要な疾患群と考えることができる。しかしながら、角結膜腫瘍および腫瘍状病変では、他の眼腫瘍と比較して悪性の頻度が低いことも特徴の一つといえる。特に、角結膜に限局した疾患の悪性頻度は、わずかに116例中4例(5.4%)にすぎなかった。

角結膜腫瘍および腫瘍状病変を診察するにあたり、我々臨床医にとって最も重要なことは、悪性の疾患を見逃さないことである。角結膜腫瘍の確定診断には、病理組織学的検索が必須であることはいうまでもないが、その臨床所見および臨床経過で、悪性か良性かの推測がある程度可能なことがある。特に、個々の患者の年齢は、その判断に欠かせない因子と考えられる。以上のことか

ら、高齢者の角結膜腫瘍および腫瘍状病変をみた場合、常に悪性の腫瘍を念頭におく必要があるものと再認識した。また、今回検索した13年間では、各年ごとに0~2例の悪性腫瘍が認められたものの、特別な増加または減少傾向は認められなかった。なお、今回の検索では悪性黒色腫は1例も認められなかったが、猪俣ら¹⁾の報告では悪性腫瘍は19例中6例と最も多く、角結膜の悪性腫瘍は、この悪性黒色腫を含め、悪性リンパ腫、扁平上皮癌が3大疾患のように思われた。

本論文の要旨は第47回日本臨床眼科学会(平成5年10月、横浜)において発表した。

文 献

- 1) 猪俣 孟, 讀井浩喜: 結膜の腫瘍および腫瘍状病変. 田中直彦(編): 眼科 Mook, 33, 結膜疾患, 金原出版, 東京, 100-114, 1987.
- 2) 高橋捷允, 服部洋視, クイナム セ イップ, 長山理三郎, 加藤 融: 眼部腫瘍の統計. 臨眼 23: 295-300, 1969.
- 3) Zimmerman LE, Sobin LH: Histological Typing of Tumour of the Eye and its Adnexa. International Histological Classification of Tumours 24., World Health Organization, Geneva, 23-26, 1980.
- 4) 財団法人日本眼科学会: 眼科用語集(第2版). 医学書院, 東京, 1991.
- 5) 沖坂重邦(編): 眼病理アトラス, 文光堂, 東京, 1992.